第13回学校関係者評価委員会議事録

開催日：令和元年9月 26日18時30分～19時30分
開催場所：専門学校　社会医学技術学院　大会議室

出席委員（敬称略）

大関健一郎（卒業生・帝京科学大学医療科学部作業療法学科・作業療法士）
杉村　夕　　（外来講師・本学院臨床心理学担当）
西村　和美　（高等学校・東京都立昭和高等学校進路指導担当）
西本　典良　（就職先・小金井あんず苑・理学療法士）
花宮　豊　　（外来講師・医療法人欣助会　吉祥寺病院・作業療法士）
濱野　智徳　（地域・濱野公認会計士事務所）
濱松　俊彦　（自治体・小金井市保健福祉部　介護福祉課　包括支援係長）

欠席委員（敬称略）

小林　一久　（保護者・医療法人社団東桐会調布病院　リハビリテーション科長・理学療法士）

事務局出席者

宮武　剛　（専）社会医学技術学院　理事長
山田千鶴子（専）社会医学技術学院　学院長
帯刀　隆之（専）社会医学技術学院　副学院長
中村　伴子（専）社会医学技術学院　副学院長
遠藤　敏　（専）社会医学技術学院　キャリア支援室長
和島　英明（専）社会医学技術学院　理学療法学科長
河野　達哉（専）社会医学技術学院　作業療法学科長
清水　茂　（専）社会医学技術学院　事務長
福井健太郎（専）社会医学技術学院　作業療法学科教員　書記
深井　牧子（専）社会医学技術学院　事務職員

【議事録】

1．理事長挨拶（宮武）

挨拶と共に、学院後援で開催するシンポジウムを紹介した。地域に向けて存在感を高める一環としての取り組みであるとのこと。

2．学院長挨拶（山田）

次年度の指定規則改正に関する学院の現況などが報告された。

3．自己評価委員長挨拶（深井）

挨拶および配付資料の確認を行った。

4．議長の選任

濱野委員に議長を依頼し承諾。以下議事次第に従い議事が進行された。

5．前回議事録の確認（署名人：西本委員、濱野委員）

6．学院の概要報告（清水）

①平成30年度学院の概況報告

夜間部・昼間部とも定員において変更なし、在籍学生数446名（前年度5名増）、行事、平成31年度学生募集結果、国家試験等の報告がなされた。国家試験合格率については、理学療法学科夜間部は全国平均を上回ったが、理学療法学科昼間部、作業療法学科は下回る結果となった。また、理学療法学科夜間部も新卒者では全国平均を下回った。

一般財団法人日本リハビリテーション振興会としての卒業生は平成30年度が最後であり、累計卒業生数は3,506名となったとのこと。

②平成31年度事業計画

学校法人日本リハビリテーション学舎として初の事業計画になるとのこと。

単年度の重点課題として

・HPの効果的活用や高校・大学訪問などを強化し、学生募集の継続的強化を行う
・作業療法学科卒業生に対する求人の急増に鑑み、同学科昼間部の創設を検討する
・新カリキュラムに対応するための臨床実習指導者向け研修会を実施する
・同窓会と共同で卒後教育に取り組む
・2023年の創立50周年に向けて、同窓会等と協同し記念事業の検討を開始する

等が挙げられた。

その他、学校事業実施予定、職員人事、学生在籍状況及び担任一覧等が報告された。

③決算報告書

平成31年3月末の資産の保有状況および正味財産の増減内容について説明され、財務状況は良好であることが報告された。

7．平成30年度自己評価報告書についての報告（清水）

報告書について説明後、質疑応答を行った。

濱野：国試の合格率向上について、委員会があるが具体的にはどのような対策か。

帯刀：これまでは対策として担任主導で個別面談を中心に行っていた。学科、国試対策委員会と、組織的に行うことになって2年目になる。それぞれ個別面談・相談、学習計画、学科全体の中で指導教員を決め、グループ分けをして学習活動を進める。また、模試、過去問を使っていくことや外部業者を利用して公開模試およびスマホを使った問題配信アプリの使用、学内での勉強会という形で補習を全10回実施する。なかなか年度によってもその実施が隅々に行きわたるかどうか違いがある。これまで行き届かなかったという反省があったため、今年度は委員会がリーダーシップを取り、国試対策を強化している。また一方で対象者だけでなく、下級生（1～3 年）についても国試対策を踏まえて対策をしている。

花宮：「合格率の向上」となっているが、目標はあるのか？

帯刀：まずは全国平均を下回ってしまったので、全国平均を上回ることが最低ライン。少なくとも合格率90%以上は行きたいと思っている。

山田：これまで当校は成績が悪くないという歴史があって、学生の自主性に任せる校風だった。さすがに昨年度の結果は教職員全員ショックを受けた。現在では教員の認識も変わってきて学校全体で取り組もうという雰囲気である。今年すぐに大きな成果が出るかはわからないが、まず身につけなければならないことは身につけていくようにしていく。そのための対策は取っているので、長い目で見ていただけたらと思う。

大関：当校（帝京科学大学）も大変だった。学院の対策を聞いて、特に目新しい対策はなかったのか、今までやってきたことを大切にしていくということなのか、魔法のような方法があれば良いが、

なかなか魔法のような勉強法はなく、国家試験合格率アップの手法が見つからないところ。
ひとつ聞きたいところが留年について。私も社医学の卒業生なのですが（当時）、30人中10人は入れ替わっていたような感じだった。今、留年はどうなっているのか。落としにくいのか。

山田： クラスの3分の1の学生が落ちるようなことはない。今は落ちにくくなっている。

大関：当校は留年させにくいところがあって、無理やり上げると結局4年の時にしっぺ返しのようなものがある。これからどうなのか、もっと留年させにくくなってくるのか。

山田：私自身は安易に進級させてほしくないと思っている。これまで成績会議においても「なぜ上げない？」といった疑問もないし、無理やり上げることもしていない。今はシラバス等で行動目標を掲げて、それに合わせた評価方法を明示している。どうなると再試験になるか等も明示されているので、それをクリアしていくと当然のことながら進級できる。ある意味そこをハッキリさせたことで落ちにくくなっているかもしれない。学生のレベルが上がったということはないかと思う。大関先生が当学院にいた頃に比べると、システム的に落ちにくくなっているかもしれない。意図的に学校としてそうしようと思っているわけではない。

大関：当校では留年させると学生がやめてしまうため、留年のシステムがなくなった。落としても上の学年に上がってしまう。留年をやめることで、大学をやめる機会を奪ってお金取るような形になってしまう。それで上がってきた人が国試受験となると国試合格率も下がってしまう。昨年度は社医学より当校の方が合格率悪かった（昨年度50数%）。そのため、留年制度はどうなのかと思い、聞かせてもらった。

8．卒業生／就職先アンケート（深井）

アンケートの結果の説明後、質疑応答を行った。

西本：卒業生のアンケートはどういった目的で始まったのか。

山田：学校というのは、基本的に就職して数年たった頃に満足してもらえるものを提供するような学校でなければならないかなと。日頃学生に接していると目の前の学生の満足度を高めたいと思ってしまうが、本来の専門学校の役割としては卒後 2～3 年経った卒業生が振り返ったときに「良い学校だな」と思ってもらえるような学校にしたい。そんな思いを 7～8 年前に抱いてから、アンケートを実施するようになった。定点観測のように毎年、卒後3年の学生および勤務先施設を対象に実施している。

西本：全体的に卒業生は身びいきではないか。さらに聞き方がある意味大雑把。それでプラス方向に結果が出そうな印象がある。卒後2～3年目の卒業生にフォーカスするのは良いが、むしろ何人かフォーカスして聞いても良いのではないか。あらためて「卒業して良いと思ったところはどこなのか」「改善すべきところはどんなところなのか」、そういう聞き方をしないと、たぶん何回やっても同じような答えしか出ないのではないか。学生は他の学校で教育を受けている経験がないので、あまり比較にならないのではないか。他の 4 年生大学から来る人もいるが、結構普通の大学と次元が違うので比較にならないのでは。
学校法人になって、先生方がどういう学生を育てていきたいのか。目の前の国家試験等の数字もクリアしていかなければならないし、「社医学ってこうなんだ」というのが見学に来た高校生に伝わるのか。何をどう伝えるのか。難しいけれど。このアンケート結果はデータ数も多くないし…。

山田：アンケートを始めた頃は回答数が多かった。昨年から卒業時にもアンケートを取っている。そうすることで、2～3 年後に同じ人にアンケートを取った際、回答数が増えないだろうか。質問項目についても良い案があればお知らせいただきたい。

清水：多くの学校で、卒業生にアンケートを実施している。大関先生の大学はどうか。

大関：他の学科はわからないが、作業療法学科においては実施していない。卒業生企画の勉強会や懇親会で情報を得たりしているが形にはしていない。

清水：自分のところに対する厳しい意見もそのまま挙げることで透明性を保てるのかなと。大学でも必死にやっている印象を受けている。

大関：自分が学生だった頃のことをすっかり忘れている卒業生が多い。このアンケートにもあるが「実習レベルの学生を育ててから送り出してくれ」と学校に求めている人がいる。何を言っているのかな、と思う。以前、ギリギリの点数でOTになった学生がいた。数年後その学生が実習指導者になり、実習地訪問で会うことになった。「最近の学生はどうなっているんですか。こんな感じなんですかね」と言われて、「当時のお前よりマシだろ」と。卒後3年目とか5年目とかは、ちょっと天狗になっていることもあり、ちゃんと評価できる年代ではないのかなと思うが、聞くこと自体は良いのかなと思う。

他の学校のことは知らないのだけども、逆を返すと社医学のことはよく知っていて、社医学がどう変わってきてしまったのかと、そういったところはよくわかっている。また熱心な人が多いから、他の人が言えないことを言ってくれる。そういうところは学校として聞きたいだろうし、そこから気づくこともあるのではないか。

アンケートの実施方法や質問内容に甘いところがあると思うので、もっと活用できるように改善していっていただければ、良いのではないか。

9．その他の報告事項（前回の報告書について）（清水）

前回作成した学校関係者評価報告書について各委員から多くのご意見・ご提案をいただいたとの報告があった。

10. 平成30年度学校関係者評価報告書の作成要領について（清水）

昨年度の報告書の評価（コメント）の書き方について説明があった。12月31日までに返送してもらい、集計後3月にまとめたものを報告することで了承された。

11. 次回の開催について（清水）

令和2年3月の木曜日に開催予定。

令和2年 3月26日

議事録署名人： 杉村 夕

令和2年 3 月17日

議事録署名人： 濱野智徳